

公益社団法人私立大学情報教育協会
平成 26 年度第 1 回知の探究サイバー協同学習支援委員会議事概要

- I. 日 時：平成 26 年 5 月 20 日(月) 16:00 から 17:40 まで
II. 場 所：私情協 事務局
III. 参加者：向殿担当理事、國領委員長、青木委員、大原アドバイザー
事務局：井端事務局長、野本、藤江（記）

IV. 検討事項

26 年度中にテーマの洗い出し、問題設定をして 27 年度の構想案へ進めていく。

1. 委員の意見

【構想の具体化に関する意見】

- ・ 大学のアンケートでは約 3 割が賛同、7 割は具体性に欠ける内容なので判断できない結果であった。
- ・ 事業としてパイロットとしてモデルを提示するのか、構想を作って 21 世紀型の教育モデルとし、紹介するのに留めるのか、定まっていない。
- ・ 経常費も相当必要と思われるので、構想で留めても良いのではないか。
- ・ パイロット的な事業として「実験」を行ってみる。「実験」結果の公表で留めたらどうか。
- ・ 高校生、社会人 他大学等、広いフィールドで価値観の違う人たちの中で、学びをチャレンジさせる。個々が持っている能力や知を創発的に高めることができる私情協ならではの事業と考える。
- ・ 私情協が定量的事業として展開するのは難しく、パイロットとしてのモデルを示すのが良いのではないか。
- ・ 構想が具体的でないし、不安だという意見があるので、実効性のある構想にしていきたい。
- ・ 本構想に関し、単位認定は行わない。構想の狙いは、志のある優れた学生を対象としており、大学の授業とは関連を持たせない。
- ・ 最近はややアクティブラーニングに取り組まなければならない風潮が出てきた。私情協がパイロット的な取り組みを見せて、アクティブラーニングの一つの在り方として示しても良いと思う。
- ・ パイロットで失敗しないように、どれだけ魅力があるか、実現可能性があるか、相当設計しないと、難しい。
- ・ パイロット事業を目指した構想の具体化を目指したらどうか。実現可能性はある程度考慮する。その結果、大学が構想を部分的に使ってくれても良い。
- ・ 社会の「知」を集めてテーマを実現していくという、ネットを使った新しいアクションで、大学の先生方だけでなく、オールジャパンのファシリテーション体制で学生を支援していく、そのようなグローバルな構想として取り組みたい。
- ・ ターゲットは高校生・30代の社会人がいいのか、テーマは何が良いのか、検討を重ね、私情協が実施するなら、「こういうプロファイルの人に向けて」「こういう狙いで」、「こういうやり方で」実施するのが良いのではないかと、方向を纏める必要がある。
- ・ 地方大学の就活は大変な状況なので、地方大学向けのバーチャルインターンシップを企業に依頼して組み込み、就活プロセスに入れるなど、狙いを絞ったらどうか。

【テーマ設定に関する意見】

- ・ テーマの設定は、多くの人に関心と興味を持ち、自然科学、社会科学、人文科学にまたがるテーマがいいのではないか。
- ・ 「安全・安心」は受け身のテーマなので、起業をイメージする攻めのテーマを考える必要がある。
- ・ テーマを若者に考えさせるのなら、教育の未来を考えさせるというのはどうか？
- ・ テーマを事前に与えないと学生は動きづらいのではないか。学生の自己満足で終わらないようにしなければならない。
- ・ プログラミングのテーマは適切だ。学生の作ったものの設計思想をプレゼンさせる。結果が目に見えて、具体的なテーマの方が学生は取り組みやすい。
- ・ 経営としては、マーケット参入の意思決定問題を数字の根拠を学生に作らせて、それを議論をさせる。適当な数値を作ると成り立たないので、学生は真剣に取り組んでいる。
- ・ 社会貢献のような学生が魅力を感じるテーマが良いのではないか。社会貢献とは個人の社会貢献もあれば、組織としての社会貢献もある。学生の捉え方は様々でよい。
- ・ テーマは産学連携で話題とならないような、テーマを設定したらどうか。
そのような意味では「安全・安心」のようなパブリックなテーマは適切かもしれない。最近の「安全・安心」はネガティブな情報が多く、「安全・安心」で世の中を良くしようという観点で報道もされていないので、テーマとしては面白い。
- ・ 色々なジャンルから知恵を出してもらい、根を広げて色々な角度で学生が学べるようにしたい。色々なジャンルで物事を考える訓練をさせたい。若者に新しい未来を創るための提案をさせて、新しい未来に向かって、どう取り組んでチャレンジしていくのかを社会に発信させていこうという考えである。
- ・ 若者から見た新機軸を常識にとらわれることなく、社会に発信し社会からフィードバックをさせたい。

【構想設計に関する意見】

- ・ 大きな構想(ビジョン)を書くのと、現実に動くパイロットを設計するのでは大きく違う。
- ・ 懸念されるのは、グループを作って討論を始めた結果、途中であまりに攻撃をされてしまい、議論がそこで止まることだ。参加者全員に議論を継続させる責任が生じる。
- ・ 議論に参加したもののだけの議論となってしまうがちだ。周辺を巻き込んでいく力がないと、そのグループの中だけの議論で満足してしまう結果となる。
- ・ 議論を各大学が見に来たり、そこに参加していない人たちも興味を持つような、発信力も一緒に作り込まないと非常に厳しい。
- ・ 継続性・発信力・求心力を合わせ持つ設計が必要だ。
- ・ 議論はクローズで、見るのは自由という、仕掛け作りを考える必要がある。
- ・ 当初の構想はネット上にフォーラムとして知識提供者のプラットフォームを作ろうと考えた。例えば、ある方は人文系の観点で、ある方は自然系で議論し、それを学生が聴講をしているようなイメージだ。時間はTEDのように10分くらいでの話で想定していた。
- ・ テーマに対して学生参加者の他に知識提供者で議論をし、それを参考にしながら、考える素材を提供してもらいたい。そこに議論を重ね、グループとしても方向性を出していくようにしたい。

【ファシリテータに関する意見】

- ・ 解のない問題を自主的に取り組んで社会の意見を聞きながら、ファシリテータが調整していくしかない。
- ・ 解のない問題に対して、誰がどのようにアシストするのが問題だ。
- ・ 単なる思い付きの議論にさせないように、素材を知識提供者が投げ込み、基礎素材を提供し、ファシリテータが適切にサポートし、そのテーマに沿って学生の参加者たちが実施していくイメージだ。
- ・ ファシリテータに相当なノウハウが必要であり、その訓練も重要だ。
- ・ ファシリテータは院生か、大学をご退官された先生を考えている。ネットの上で、学生が知識に行き詰った時に知識を提供する。グループの議論のマネージメントが役割だ。
- ・ ファシリテータが議論に介入し過ぎると、ファシリテータの思っている方向へ誘導することになってしまう。ファシリテータはあくまでファシリテーションだけに留めないといけない。

【運用に関しての意見】

- ・ 学生のモチベーションを保って、一定のクロージングまで持っていけるかがテーマだ。
- ・ コミュニケーションとして、Face to Face よりもタイムラグもあるし、いろいろな制約もあるので、ある程度形式化して行う事が重要だ。ランダムに発言させると議論が成り立たない。5分間説明の後、5分反論等のルールを設定することが重要。ルールをきちんと設定すれば実現性はある。
- ・ 成果を社会に発表させて意見を頂き、振り返りをして、学びをスパイラルで展開させる。最終的には、9~10ヶ月で結果を出させたい。同じ年次で考えさせることが重要で、1年では長すぎると考える。
- ・ コミュニケーションは同期型と非同期型がある。非同期型のコミュニケーションは一見良いようだが、ファシリテータが24時間仕事となり、負荷は相当のものとなる。決まった時間帯と回数でチャット等を利用し、濃密な議論を実施した方が、良い結果が出るのではないかな。
- ・ 私情協で実施した結果、評価が高く、他の大学が実施しようとした場合に実現可能でなくてはならない。大学が実施するに当たり、私情協としては運用のサポートは出来ないが、パイロットを実施したノウハウは公益事業として公開する。

V. 今後のスケジュール

- ・ 今回は、内容に踏み込んだ具体的な議論が出来たので、次回は社会貢献活動という意見も踏まえながら、具体的なテーマを決めていきたい。
次回は、9月16日(火)17:00から開催することとした。